

京都哲学道場紀要

第一号

2011年2月

Q&A形式による簡易な哲学体系 坂田正幸	2
睡りのない夢——文学の第一法則について 谷口一平 (itikun).....	6
構造の外へ 深草周	8
ジェイコブに訊く Q&A 土田久作	11

Q&A形式による簡易な哲学体系

坂田正幸

本稿は現時点での私の考えをQ&A形式でまとめたものである。

—「生きてる」って何ですか。

現実の経験が成立していることです。現実の経験とは現に経験中の経験であり、今のあなたの経験だけです。想起するのは経験したこととして思い出す過去の経験であり、予期するのは経験することになると想像する未来の経験ですが、それらは現に経験中の経験ではありません。

過去の経験は今も現実ではなくても、その時点では現実であったし、未来の経験も今は現実ではないが、その時点では現実になる、と思われるかもしれません。しかし経験とは別に経験の主体は存在しないので、あなたとはあなたの経験そのもののことでしかないのです。あるときのある経験が現実であるのは、そのときのその経験じしんにとってだけです。ですから、あなたは数十年生きると思っているかもしれませんが、実はあなたの寿命は数秒程度なのです。

—経験は変化しつつも持続し、私の今の経験は、私の過去・未来の経験と記憶でつながっています。そして私の経験はいつも私の経験じしんにとっては現実です。ですから、経験とは別に主体が存在しないとしても、それだけで十分で、この身体の生存中、私は生きているといえると思います。

そのような考え方は分裂の思考実験で破綻します。しかしそれは後にして、次の質問に移りましょう。

—時間とは何ですか。

経験は変化しており、規則的な変化と対応させて定量的な時間が導入されます。動きや変化とは別に時間があるわけではないので、時間の始まりや終わり、停止は無意味です。相対性理論の「時間の縮み」というのも実は一様に動きが遅くなるという意味です。

—物は実在しますか。

見えている物は、分子原子や素粒子の集まりであり、それらはエネルギーの塊であると考えられています。しかし物の集まりである世界が実在するかと問うのは無意味です。実在するとは、知覚されていないときでも存在するという意味でしょうが、存在することは知覚することで検証するしかないので、存在するとは知覚されることでしかありません。だから知覚されていないときに物が存在するとか存在しないというのは、不可知ではなく無意味です。

覚醒時の世界が本物で夢の世界は偽物か、毎晩の夢が整合的に連続している場合はどうか、といった問題も、世界の存在を問うているので無意味です。夢を見ているときは夢の世界が存在し、覚めた時点では存在しないのです。

—空間とは何ですか。

風景は乳児には二次元に、私たちには奥行きのある三次元に見えています。そして光路の湾曲を見慣れている中性子星人がいたら、彼らには四次元に見えているでしょう。しかし、空間とは物ごどのように配置されているか見え方であって、物とは別に空間があるわけではありません。ですから、空間が本当は何次元かと考えたり、空間そのものの果てを考えたりするのは無意味です。

—現実の経験とは何ですか。

他人の発言や振る舞いから他人の経験が考えられます。それは考えられる経験ですが、その経験においてはそれだけが現実である経験として考えられます。覚醒中の脳の数だけ経験が成立していますが、いつのどの経験においても当経験が現実と考えられているのです。つまり現実とは各経験にとって当経験だけが持つ再帰的な性質です。だから他人に「この経験だけが現実だ」というのは無意味です。これが「端的に」現実の経験であること、他は「考えられる」現実の経験に過ぎないこと、これは自分で納得するしかない主観的な真理です。他人とのやり取りに使用される言語で、あなたの特別性を表現しても無意味です。

他人の経験は考えられるだけで、経験できない、というのは経験的事実ではなく文法的真理です。たとえば他人の歯に痛みを感じても、他人の歯痛を感じたのではなく、あなたが他人の歯に痛みを感じたこととなります。

—他人には消防車が青く見えているとか、そもそも他人には意識がない可能性がありますか。

1つ目は生まれたときから消防車が青く見えているのに、消防車の色は「赤」と教えられるので、本人も周囲もそれに気づかない、といったことですね。あるいは私だけみんなと違っているのかもしれない、ひょっとしたらみんなバラバラなのに同じ色を見ていると思っているのかもしれない、ということになりますね。2つ目は睡眠中や麻酔中だけでなく、覚醒時でも実は他人には意識がないのかもしれない、ということですね。

あなたはいきなり殴られれば、痛みを感じ、「何をする！」と怒鳴るでしょう。でも、他人はいきなり殴られても、単に「何をする！」と怒鳴るだけです。他人についてはインプットとアウトプットしか観察できません。では「他人にも消防車は赤く見えている」、「他人には消防車が青く見えている」、「他人には何も見えていない」といった想定は無意味なのでしょうか。これは想定に意味があるかないかの意味をどのように使うかによります。「想定に意味がある」が「想像できる」という意味なら、それらの想定は有意味だが不可知、「想定に意味がある」が「検証できる」という意味なら、それらの想定は不可知でなく無意味です。

—独我論は無我論になりますか。

独我論と無我論の関係についてですね。他人に経験が生じているか生じていないかはわからない、というのは不可知論ですが、他人には経験が生じていない、というのは独我論です。独我論では「私の経験」だけがあり、「他人の経験」はないので、あえて「私の」と付ける必要がなくなり、無我論に至るといわれます。しかしここには言葉の混乱があります。他人の経験がなくても、その唯一の「私の経験」に経験の主体を認めるのなら、独我論は無我論にはなりません。逆に他人の経験を認めても、経験の主体を認めなければ無我論になります。

—経験とは別にそれを経験する主体は存在しますか。

脳の中に心が宿っていると思われがちです。しかし経験とは別に経験の主体は存在しませんし、存在しないものは持続もしません。人名や人称代名詞を主語にして経験を表現したり、それらに「の経験」を付けると、経験の主体や経験の所有者が存在するという誤解を招くのです。たとえば「私は映画を見る」という表現は、知覚対象の映画とは別に、心・魂・自我といった知覚主体を要求し、「彼は映画を思い出している」という表現は、過去に映画を見ていた主体と、今それを思い出す主体の同一性を要求します。ただし経験主体のことではなく、「現実の経験そのもの」のことを私というのなら、これは特殊な言葉遣いですが、それは存在するといえます。

—私が別人であった可能性はありますか。また最初から生まれてこなかった可能性はありますか。

例えば私は坂田家の次男ですが、それには理由がないので、別人であってもよかったです。しかしこれから別人になることはできません。私は持続しないからです。ただし最初から生まれてこなかった、つまりどの経験も現実ではなかった、という想定は無意味です。まず現実の経験が選択されないと何も始まりません。現実の経験が成立すれば、たとえば目の前にパッと風景が広がれば、その内容によっては他の経験が考えられ、これが選ばれているということになります。また、経験の内容から過去未来が考えられれば、どれも選ばれていなかった時の状態も考えられます。

しかしどの経験においてもその経験が選ばれているので、「選択されている」もまた再帰的な性質です。自らを選択されていると考える複数の経験が成立しているのです。ですから、永遠に選ばれないというのは、選ばれない経験を考える誤りです。

つまり「私にとってどれも現実ではない」というその私も経験に過ぎないのですが、経験である以上その経験自身は現実なので、どれも現実ではないというのは無意味な想定になるのです。

—どうして物質に過ぎない脳内の分子原子の動きから精神現象が生じるのですか。

脳と精神状態は因果関係ではなく、同時対応関係です。これは物と心の二元論ではありません。精神現象として視覚を考えます。視界の一部にモニターがあり、そこに自分の脳状態が映っている

状況を考えれば、視覚風景の全体とその一部である脳状態は全体と部分の同時対応関係であることがわかります。ある時の脳状態を原因とすれば、その結果とはその後のある時の脳状態のことではできませんから、脳状態と視覚風景は因果関係ではありません。また脳も風景も物でできているといえれば唯物論になりますし、どちらも見えているという精神現象だといえれば観念論になります。

一分裂したらどうなりますか。

まず、独立した2つの経験を両方経験することはできません。両方経験したらひとつの経験になりますから、2つの独立した経験を両方同時に経験することができないというのは、文法的真理です。あなたがこれから分裂する場合、分裂後は今のあなたの経験を、思い出せる経験が2つ成立することになります。しかしこの場合、「私はどちらを経験することになるのか」と問うのは無意味です。また今、あなたが融合された後なら、同時に成立していた2つの経験を思い出すことができます。しかしこの場合も、「では私はどちらを経験していたのか」と問うのは無意味です。要はそのつど、それぞれの脳状態に応じた経験が成立しているだけで、経験とは別に、それを経験する主体は存在しないのです。過去・未来のどの経験においても、当経験が現実であるだけです。しかし過去・未来の経験はそういうものとして考えられるだけで、現に現実の経験は今のあなたの経験だけです。

今の時間幅はどのくらいですか。

会話や音楽をいくつかの音のつながりとして聞いたり、時計の秒針の動きを動きとして見たりするためには、それらの経験は一定以上の時間幅を持たなければなりません。そして今は3秒程度持続していると感じられます。これは「直感的な今」です。しかし経験は、例えば視覚風景は連続的に変化しているので、今が何秒かと考える必要はふだんはありません。しかし、現実の経験は、今の経験だけであり、私とは「今の経験そのもの」でしかないとすれば、その「今がどのくらい持続するのか」という問題は、「私の寿命が何秒なのか」という深刻な問題になります。

思い出す経験はすでに過去の経験です。「今浴室にいる」といえば脱衣していたのは過去であり、「今浴室でリンスをしている」といえば浴室でシャンプーをしていたのは過去です。このように「今、何々をしている」という発言は今を切り出します。こちらは「文法的な今」です。しかし「今何々をしている」と言うのにも時間がかかるので、あまり短い今は切り出せません。

では数分間過去を思い出さず、ぼーっとしていた場合、そのときは数分間「今」が持続していたことになるのでしょうか。その場合でも、数秒以上前はすでに今ではなくなっていた、という気がします。

睡りのない夢——文学の第一法則について

谷口一平 (itikun)

夢をみることは、日記を誌すことと似ている。日記を誌す経験とは、日記に誌される経験に外ならないからである。日記を読むとき、ぼくは自分が日記に誌したものを読むのではない。ぼくはただ、日記に誌されたものを読むのである。彼がそれを誌して立ち去って以来、ぼくに為せることの全部は、そこに留められた彼の文字を読み解きながら、彼の永い不在にひたすら打ちのめされることだけである。彼のいまだ到来せぬあいだ、ぼくが為さねばならないことの全部は、そこにぼくの文字を、それが彼へ届いて、彼に読んで貰えるそのことを祈りながら、綴り続けることだけである。ぼくは彼を思い出すことができないが、彼を待っている。だから、日記を誌するためには、ぼくは日記に誌されなければならない。日記を読み、また誌するという経験において、ぼくが深淵から自己を明け渡されず、また深淵へ自己を明け渡すこともないのだとすれば、それを彼から差し出されたものとして引き取ることも、また彼へ差し出すものとして送り返すことも、どうして可能となるのかぼくには分からないからである。日記に誌されることを通じて日記を誌するという営為のみが、そこへ自己を明け渡し、そうして明け渡されたものとしての自己を彼へ差し出すのである。けれども、ぼくを日記に誌す者とは誰なのだろうか。その者は、ぼくを日記に誌すことを通じてぼくを日記に誌されたものとするので、ぼくを披読されるべき一葉の手紙として彼へ差し出すことを可能ならしめる者であり、従って、ぼくを彼方より配達され来るものと成し遂^{おほ}せるために、ぼくを彼方へ送別して立ち去り、かくしてみずからを爬^かき消した者の筈である。なるほど、そのような者とは彼である。しかし、ぼくを日記に誌す者とは、同時に少なくともぼく自身である。なぜなら、ぼくが日記を誌すのだからだ。すると、彼とはぼくであり、ぼくとは彼であったのだろうか。

夢をみるという場合においても、夢をみるためには、ぼくは夢からみられなければならない。夢には、その夢をその夢として眺めている自分などは含まれえず、そのため夢がみられたものとなることは、夢の公理からして不可能だからである。それどころか、夢はぼくを睡り、ぼくは夢からみられたものとなるのである。このことをよく説明するのは、夢の会話であるだろう。夢のなかで、誰かがぼくに話しかける。ぼくが誰かに話しかけるのではない。たとえ、ぼくが誰かに話しかけたのだとしても、それは誰かがぼくに話しかけるに当たり、たまさかぼくの口を経由して、その者がぼくに話しかけたにすぎない。いったい、その声を発した主体とは誰なのだろうか。ぼくの夢に踏み入れる者が、ぼく、ただひとりである以上、そこに誰かが居るわけもなく、そこで誰かと出会う余地など、従って無い筈だからである。これは不法侵入という意味において犯罪であり、為しえた者が居ないという意味において完全犯罪である。このことと対蹠的に、ぼくが目覚めているとき、ぼくは誰かに話しかけることができる。発声するのは必ずぼくである。誰かがぼくに話しかけたと思しい場合も、ぼくはその口を暗喩に利用して、ぼくの聴きたいことを聴きたい通りに言い立てているだけなのである。けれども、誰がその声を聴き届けるのだろうか。ぼくの言葉は誰を目がけて虚空を渡るのだろうか。それは、あるいは夢を目がけているのかも知れない。言語が可能となるためには、言語の外部が

らその存立を支えるものが、例えば逆説としての夢が、不可欠なのかも分からない。夢から呈示されたものを、夢に対して反照すること。夢から夢へ、ひとしれず転送されてゆくものとは何か。ぼくは文学の話をしているのである。

文字を綴ることは、文字を可能にするものとしての夢を綴ること以外ではない。言葉が有意味なものとなるためには、言葉は無意味なものを語らねばならない。意味するとは、無意味を表現することだからである。それは深淵から明け渡されたものをそこに象^{かたど}るための形代なのである。これとは逆に、意味あるものを語ろうと試みることは、常にばかげた試みである。なぜなら、その言葉は無意味を表現した当の形象を再び形象において代理することになるからである。意味あるものが意味あるものを語るということはあるにない。そのとき、意味を語ることは夢みる者を夢みることであり、意味から語られることは夢みられる者から夢みられることである。それは事実夢みること、事実夢みられることと何のかかわりもなく、言表における統辞的真理、空漠と回帰する自同律であるにすぎない。むしろ、無意味から語り出されねばならない。無意味と対当し、無意味から象られたものとなることにより、ぼくが意味あるものとして言葉に意味されることは可能となる。だから、文学の第一法則とは次のものでなくてはならない。すなわち、夢は世界である、また、世界は夢である、ということ。夢は、虚空を世界へ主題提示する絶対的主語として、また、世界を虚空へ判断する絶対的述語として作用する。これは夢の定義であるというよりは、本質的に世界の定義そのものであると考えられる。世界の存立は、夢を容れる形式としてのみ所与のものとなりうるからである。夢は、世界を無から開示し、次の瞬間、抹消し去る。

夢をみることとしての文学、日記を誌すこととしての文学。すなわち夢日記としての文学。このとき、文学は夢を黙示する形而上学としてみずからの仕事を明らかにする。それは、夢を理解することなのではない。それどころか、夢を忘却することにおいて文学は成立すると考えなければならない。どういうことか。夢を考えることは、夢は夢である、という虚空の主述言明を考えることである。無論、これは前言語的言明であり、自同律ではない。夢であること、ただそのことだけを前提に、夢は夢である。従って、夢は思い出されるから夢とされるわけでないことは言うまでもないが、同時に、夢は思い出されないから夢であるという思想も拒否されなければならない。夢は、夢のない睡眠において、夢みられるのである。その夢は、睡りのない夢であり、たんに夢である。たんに夢であるということ、夢であるにすぎないということが、夢は夢である、という言明に対する、文学に唯一可能な応答、失当せざる返答なのではないだろうか。ぼくは夢を知らないのである。ぼくは夢を知らないことにおいて、端的に夢であるのである。このことは、文学が夢の忘却作業であることを示唆する。忘却することは、思い出せなくなることは違う。それはむしろ、知らない、という断定的経験を通じてそこに世界を思い出すことなのである。ぼくがまだ彼ではないのは、ぼくがまだ全的に彼を忘却できていないからである。なるほど彼はぼくをそうすることで、彼の存在をまるごとぼくへ贈与したにもかかわらず、彼のことを、ぼくはまだそうすることができず、彼へ贈与できるものがここにはまだないのである。死者を弔うこと、それは死者を忘却することに外ならない。彼を祈りの形に作り出すこと。彼を深淵へ撒骨すること。ぼくの知りもせず、思い出すこともできない彼と、ここで出会うこと。地上を夢への供物とすること。彼と会話すること。彼を見送ること。睡りのない夢をみること。夢を。夢。

夢は、少し青褪めている。

構造の外へ

深草周

0. 構造と外部

私たちの生活をゲームに喩えてみれば、大抵の場合、私たちはルールに従って暮らしており、ルール違反を起こした場合でも、罰則に従って処分される。法律や礼儀作法、義理人情のようなルールにきちんと従っていれば何が起きても大丈夫だし、またそのすべてをしっかりと把握することが世の中のすべてを把握することであるようにも思われる。しかし、そうしたルールの外部には一体何があるのだろうか？ また、ルールはなぜ変化するのだろうか？ 本稿では可視的な「構造」の外に「暴力」と「価値」を据え、変化の原動力を創造性に仮託する(ただしこの「創造性」は意味不明の語に留まる)。

1. 構造と暴力

私たちは「構造」の中で暮らしている。構造とは、識別可能な要素の組み合わせやその規範のことである。たとえば、将棋や囲碁、チェスやオセロなどのゲームのルールがこれに当たる。ゲームであれば要素として札(トランプや花札)やコマ、得点、各プレイヤーが存在する。同様に、スポーツや共同体(国家や自治体、学校や企業、哲学道場のような文化的会合など)の制度・手続き、地域や場に応じた掟やタブーも構造の一種である。構造の中の要素をどのように動かし、関係させるか、またはそうしてはならないかは規則によって定められているが、この規則は条文や数式で明記されているような明示的なものから、慣例や担当者の心証によって決まるものまで濃淡がある。

私たちは構造の中の一つの要素として原則として規則に従って動くし、過去の行動を規則に基づいて正当化したり、未来の行動を規則を規範として構想したり決定したりする。他人の行動についても原則として何らかの規則に従って動くと考える。規則と食い違う言動を行なうと、相応の制裁——罰金や共同体からの追放を課せられることになる。これらの制裁は究極的には暴力によって強制される。だから、構造は暴力に拠って保持されるし、犯罪者やマフィアなどの組織暴力が構造を侵そうとすれば、構造は自前の暴力装置——保安官、自警団、憲兵などの警察組織によって対応する。

私たちの生活は幾つもの構造によって統制されているが、単にTPOに応じて従う構造を使い分けたり、自分がどの構造、どのゲームのルールに従うべきかを悩むというだけではなく、構造そのものの存立を脅かす外部としての無秩序な「暴力」が存在し、構造はこの「暴力」に対抗するために自らも「暴力」を内蔵するようになる。つまり、構造がすべてを統制していると言えば済むわけ

ではなく、常に無秩序や混沌をもたらすような「暴力」が構造の外部に存在するはずである(それが言葉の上だけのことなのか、実在するのかはここでは措いておこう)。ここでは「暴力」という表現で、あたかも人為的な脅威だけを想定しがちだが、実際には技術的・物理的・論理的限界もこの「暴力」に入れることができるだろう。

2. 構造と価値

構造はその外部としての暴力に対抗しているとした。この暴力は、たとえばサッカーで言えば、審判に見えないところで行なわれる「ラフプレイ」に相当する。しかし、構造に対する外部の脅威として暴力があるとただただでは不十分である。たとえルールを遵守していても、スポーツマンシップという価値に悖る行為は非難される。

つまり、理屈の上ではルールに矛盾しない合法的行為であり、規則の存続そのものを脅かすわけではなくても、直観的に構造が拠って立つ「価値」に反するとみなされる行為が存在する。構造の上では合法的でも価値の上では疑問視される要素が混入すると、構造はその拠って立つ基盤となる「価値」を露呈する。価値は無根拠に主張され、言葉としては何を指し示しているのかわからないマジックワードである。たとえば「自由」は価値と言われるが、なぜ自由が善いのかには根拠がない。また、将棋や囲碁などの「勝利」がなぜよいのかには根拠がないが、プレイヤー双方がそれを目指すことによって楽しみが生れる。つまり、構造としての無矛盾性・首尾一貫性とは別に価値的な限界がある。もちろん構造は価値的な限界を「価値」の構造化(形式化)によって補おうとする。ルールを整備したり、価値を共有しない者を除去することによってみえない価値が保持される。しかし、価値のみえる化(明示化・明文化)は、同時に形骸化をも進行させる諸刃の剣である。構造はみえない価値によって規制される。

3. 構造と構造

構造の外部には暴力と価値とが存在する、あるいは少なくとも存在する「かのように」言われることを書いた。一方でもちろん或る構造の外には他の構造も存在する。経済活動は或る程度は当事者同士の常識や習慣に基づいて行なわれるが、話がこじれて大きくなったりすれば、警察や司法が介入することになる。つまり、構造には上下があり、ときには階層構造を持っている。だから、私たちが「その構造はなぜ存在するのか？」と問うとき、たとえば「なぜ軍隊は存在するのか？」と問えば、「こういう歴史や伝統があるから」「国家組織を外敵から守るため」といった、より上位の構造(歴史や目的)を参照した答えが返ってくる。つまり、構造に対して「なぜ存在するのか？」という問いは、より上位の構造に対する「どのような構造であるか？」に変換されるのが常である。「なぜ哲学するのか？」と尋ねられて「私はそうすると楽しいから」と応えるならば、それは「私という人間は哲学をすると楽しみを得られるような者である」という描写に変換可能である。

しかし、こうした「どのように」に還元できない究極的な「なぜ」、つまり回答に充てるべき根拠が無

い「なぜ」が二つある。ひとつは「なぜ独身者は結婚していないのか?」「なぜ宇宙はあるのか?」といった根源的暴力に関する「なぜ」である。もうひとつは「正しいから」「自由になるから」「善いから」「美しいから」といった価値に関する「なぜ」である。言い換えれば、構造にはこの二種類の限界があって、言語(ソシユールのラング)や認識の構造の内側から世界を見渡している私たちにはこの限界の向こう側を直接にみることはできない。

4. 構造と創造

しかし、私たちは構造の変化に日々直面しているし、それはみえないはずの「価値」の変化に伴うものであるようにも直観している。人間は構造に従って動いたり、上位の構造から指令を受けて下位の構造を生成するだけの受動的な存在ではなくて、自ら能動的に価値やそれに伴う構造を創造する存在である、と思いたい(なぜかそう思いたいのである)。仮にそういう創造性が私たちに、或いは私に備わっているとしても、第三者的に・事後的にみれば構造の中でルールに従って動いたとしか解釈されないし、ひょっとすると自分自身そうとしか解釈できないかもしれない。構造を構造として解釈することは過去を見渡すことであり、私たちの現在位置を知る上で有用であるが、哲学の目的のひとつは構造の外にある価値、すなわち、まだ見ぬ面白さ、まだ見ぬ楽しさ、まだ見ぬルールを創造し、提示することであり、それは未来に対してアクセスすることである。

< 特別寄稿 >

ジェイコブに訊く Q&A

土田久作

— <私>とは何か。

言葉、一人称代名詞です、山括弧付の(笑)。しかし、こう言ったところであなは満足されないでしょう—これはこれで真実な答え方だと僕は思うのですが—あなたは別のものを期待していらっしゃる。それは僕にも解ります。

仮にあなは、<私>という言葉を使って、今現にそれである生の事実性のようなものを指し示そうとしているのであれば—“僕なら”[ジェイコブなる身体であること]に受肉している<ココローコトバ>である、と言うでしょうね。但し、[<それ>]を指示することは出来ません。

(注. []は[言葉でないもの・こと]、<>は<言葉でしかないもの・こと>を強調する符牒です)

— 指示出来ないのは何故か。

そもそも指示とは、我々の世界＝言語ゲームで営まれるゲームであって、個人の内的現象ではありません。指示は、a.我々の世界＝言語ゲームにおいて b.対比が効く(ex.事物世界に内属する[個物]etc)場合に成立するわけですが、[ジェイコブなる身体であること]に受肉している<ココローコトバ>は条件 a.&b.を充たし得ない故に指示出来ない、指示ゲームに乗らないのです。

因みに、この並列不可能性・ウイトゲンシュタインの言う「比類なきもの」という在り方を、僕は唯獨性と呼んでいます。

— 受肉とは何か。

“僕の場合”で言うと、まず始めに所与として[ジェイコブなる身体であること]があったわけです。とにかく[これ]は端的に与えられている。翻って、<ココローコトバ>というのは、幼児期における言語習得のプロセスを通して[ジェイコブなる身体であること]の内に形成されたものです。

これを存在論的な観点から言えば、[前者]は自存的存在であるのに対して、<後者>は単独では存在出来ないということになります。<ココローコトバ>は実体のようなものではなく、あくまでも[ジェイコブなる身体であること]において存在している[<それ>]、なのです。

要するに、個性とか唯獨性はあくまで[ジェイコブなる身体であること]に属している、というか[これ]の在り方そのもので、外部からインストールされた他人の振舞とか発語 etc 存在様式のソフトウェア—我々は”外部に表出されたそれ”を「人格」と呼んでいるようです—が<ココロ人格—コトバ言葉>だと。

我々の世界＝言語ゲームは、ソフトウェアにおける形式上の一致・同型性(外部に表出された「基準」に基づいている)に支えられています、ソフトウェアそれ自体は[<それ>]が[ジェイコブなる身体であること]において存在することで個性や唯獨性を付与されています。

もしここで中世哲学におけるあの不毛極まりない論争を想起された方は、中々に鋭い。まさしく

あの似非問題の源泉もここにあるからです。

つまり、<ココローコトバ>というのは、本質的に形相的な存在者なのですね。そして、”僕の場合”で言うと、<ココローコトバ>は[ジェイコブなる身体であること]に受肉しているのですから、たとえば一人称の心理的言明に質料を与えるのは[ジェイコブなる身体であること]でしかありません。<ココローコトバ>というものが、一面では<形相>的・別の面では[質料]的な存在者であらざるを得ない理由は、その出自と特異な存在性格に求められるべきでしょう。

御質問に話を戻しますと、<ココローコトバ>はアポステリオリに成立したものに過ぎないのですが、[ジェイコブなる身体であること]と<ココローコトバ>は通常言挙されるような「関係」(因果的・論理的・文法的 etc)によって結合しているわけではないので、そういう特殊な在り方をとりあえず「受肉」と言ってみたのですね。

受肉を可能にしている『力』については、ここで論じることは出来ません。それは、たとえば[ジェイコブなる身体であること]に与えられた前概念的な『力』・概念を生成する『能力』であり、記憶と深く関係しています(記憶を記憶たらしめる『力』”でも”あるのですが)。

この『力』は規則の持続とか人格の同一性といった似非問題—有名なものとしてはクリプキの「懐疑論的パラドックス」が挙げられます—において看過され続けてきたのであり、たとえ不十分なものであったにせよ、『これ』について自覚的に論じた哲学者は僕の知る限りウイトゲンシュタインだけです。

「この草原で赤い花を探して、取って来てくれ」と命令されて、私が赤い花を見つける場合、私はそこでその赤い色を赤色の記憶像と比べるのか。—そしてこの第一の記憶像がはたして正しいか如何かを検討するためには、さらに別の像も引き合いに出さねばならないか。—それなら如何して私は第一の像の方を特に使ういわれがあるか。—私は花の色を見、そして<その色>を認知するのである。(ウイトゲンシュタイン「哲学的文法」)

規則と人格の問題は同じ一つの源泉から出てきたもので—僕が<ココロ人格—コトバ言葉>と言ったことを思い出して下さい—この『力』こそが<ココローコトバ>を持続(スピノザは「永遠」と言っていましたね)させているのですが…

—言語とは何か。

<世界>を構成する形式、誤解を恐れずに言えば、<世界>そのものと言ってもよいかもかもしれません。そして、全ての哲学的—似非問題の温床は、<世界>と[世界]を混同するところにあるのです。

—現実とは何か。

Wikiによれば、「現実とは、個々の主体によって体験される出来事を、外部から基本的に制約し規定するもの、もしくはそうした出来事の規定となる一時的な場のこと」だそうです。この定義で特に問題はないものの、これだけでは何も説明されていませんよね。とりあえず図式化してみましよう。

a.[出来事]— b.[ジェイコブなる身体であること]に受肉している<ココローコトバ>— c.言語ゲーム

a.は[言葉でないもの・こと]、平たく言えば[事物世界]そのものです。b.は、今現にそれであるような生の事実性、生命の器です。c.は、我々の世界、言語的空間、有意味性の次元です。

Wiki の「定義」を尊重するなら、現実の名に値するのは a.だけです。他に拠らず、それ自体において存在し、かつ全てであるようなもの—は a.だけだからです。

b.は a.に、<ココローコトバ>は[ジェイコブなる身体であること]に属しています。<ココローコトバ>は c.にあらわれることが出来ないのもので、c.においては「表現」(振舞、発語 etc)が為されなければなりません。この「表現」に対して、<ココローコトバ>=<内語>と考えて頂ければ「受肉している」ということの意味が理解し易くなるかもしれませんね。ウイゲンシュタインの言を借りて言うなら、「機構全体＝言語ゲーム に連動していない歯車＝[ジェイコブなる身体であること]に受肉している<ココローコトバ>」です。

ここで予め言うておきますが、たとえば僕は[ユキなる身体であること]に受肉している<ココローコトバ>の存在を疑ったりはしません。問題の本質は全く別のところにあるからです。[ジェイコブなる物理的身体]と[ユキなる物理的身体]が[事物世界]に共在しているのに対して、[ジェイコブなる身体であること]に受肉している<ココローコトバ>と[ユキなる身体であること]に受肉している<ココローコトバ>が並列不可能・[存在]論的に断絶していることが、似非問題の温床—たとえば[存在]論的断絶と認識論的不可知性の混同に基づく他我問題 etc—になっているのです。

—あなたにとって<哲学すること>とは何か。

我々の悟性を誑かしているもの—我々を構成しているもの、つまり言語—に対する不断の闘い、です。

そして、それは、援軍の無い、独りぼっちな、終わりなき闘いです。ただ、全く希望が無いわけでもない。

確かに、僕自身がそれであるところのもの＝[ジェイコブなる身体であること]に受肉している<ココローコトバ>から醒めることは出来ないでしょうが、言葉が構成する一つ一つの<夢>から醒めることは出来る筈です。

僕を<哲学すること>に駆り立てているのは、そういう僕自身の確信なのです。

<編集後記>

紀要という形で、まとまった長さの文章を書いていただくことにより、各人の哲学あるいは信仰の形が、より鮮明に浮かび出てきたのではないかと思います。

哲学的な思考の始めの段階では、自分の好きな哲学者の流儀に従って考え始める。しかし、その歩みを続けていけば、やがて孤独の領域へと踏み込むことになる。他の人間とは似ていない、唯一の自分に向き合わなければならなくなる。そのような未踏の領域へ連れて行ってくれるのが哲学の一つの効用である。

寄稿者の皆さん、新たな領域を見せていただき、ありがとうございました。（さ）